

# 一刀領談

本紙客員論説委員 下條正男



しもじょう・まさお 長野県出身。国学院大学院博士課程修了。1999年から拓殖大教授を務め、昨年3月末で退官。現在は本紙客員論説委員のほか、島根県立大と東海大の客員教授。島根県の第5期竹島問題研究会の座長を務める竹島研究の第一人者。72歳。

6月中旬、中口の軍艦がこぞって日本列島を周回した。この中口による威嚇行為で想起されるのは、140年前の朝鮮半島である。朝鮮の危機は1860年、南下政策をとる帝政ロシアが清朝と「北京条約」を結んで、ロシアと国境を接した時に始まった。そこで清朝の外交官の黄遵憲は80年に『朝鮮策略』を著して、ロシアが次に狙うのは朝鮮、だとして警鐘を鳴らした。朝鮮には「切膚之災」（身にひしひしと迫る災い）が近づいていたが、

## 参院選を前に

危機意識がない、として警告したのである。清朝を宗主国と仰ぐ朝鮮では、ロシアの南下を深刻に考えていなかったからだ。

### ■危機対応力なし

この朝鮮の姿は、有事の際は米国に頼ろうとする現在の日本と似ている。ソ連（現在のロシア）によって南樺太と千島列島、それに北方四島を奪われ、10年近くも尖閣諸島（沖繩県）周辺で中国の艦艇による領海侵犯が続いても、「遺憾の意」を表明するだけだ。

ロシアによるウクライナ侵攻後、日本国内には「憲法改正」をすれば日本は自立できるとする人々が増える一方で、「憲法9条」を護持すれば日本の安全と平



日本列島を周回するよう移動している中国海軍のミサイル駆逐艦（防衛省統合幕僚監部提供）

### 現に大韓帝国の「独立」

和が保てるとする人々もいる。だが大多数の人々は、中口による「切膚之災」には関心がない。これは日清戦争の後、下関条約で「清国は朝鮮国が完全無欠なる独立自主の国であることを確認」し、「独立」が与えられた大韓帝国（朝鮮とも似ている。敗戦後の日本も「独立」が与えられたが、それを維持するにはそれに見合った国力がある。それは有事の際の政治力だが、過去の大韓帝国も今の日本も欠いている。

# 日本の選択 考える場だ

は、清朝からの使臣を迎える「迎恩門」を壊して「独立門」を建立し、使臣のための施設だった「慕華館」を「独立館」に改称することだった。日本にもこれと似た現象がある。憲法を改正し、それを「自主憲法」とすることだ。だがそれは、日本が中口との懸案を解決する政治力を持った後のことである。今年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻で、中口の方針が大きく変わったからだ。今回の中口の軍艦による日本列島の周回もその一つである。ウクライナ侵攻で苦戦するロシアと台湾有事を演出したい中国。利害が一致する中口は日本を威嚇し、極東で軍事的緊張を高めることで、日米に揺さぶりをかけている。この時に憲法を改正し、防衛費を増額すれば、報復の口実を与えるだけでない。中口が日本を威嚇するのは、日本には危機対応力がないと見透かしているからだ。

で、日本政府には領土問題を解決する意志がないと見たのである。そこで中国は翌月、大規模な反日暴動を演出し、ロシアは6月、北方四島の問題を領土問題から歴史問題として、解決済みとしたのである。さらに10年9月、海上保安庁の巡視船に中国漁船が追突した事件を機に、香港の『亜洲週刊』は、韓国に倣えば尖閣諸島は奪還できると煽った。竹島を占拠する韓国政府は「領有権問題は存在しない」とし、日本政府も尖閣諸島の「領土問題は存在しない」としているが、取り巻く状況は異なる。危機対

を演出したい中国。利害が一致する中口は日本を威嚇し、極東で軍事的緊張を高めることで、日米に揺さぶりをかけている。この時に憲法を改正し、防衛費を増額すれば、報復の口実を与えるだけでない。中口が日本を威嚇するのは、日本には危機対応力がないと見透かしているからだ。

### ■逆転した政治力

中口が日本の弱点を看破した契機は、2005年3月の島根県議会の「竹島の日」条例制定時である。当時の日本政府が、条例の制定を阻止しようとしたこと